

王維の「少年行」について

―新題の樂府の詠法に関する一考察―

齋藤 聡

はじめに

王維の「少年行」は、遊俠の少年を主題とした四首連作の樂府である。

この四首は、テキストによつて配列の順序が異なっている。

王維の別集や『樂府詩集』以外の總集⁽¹⁾では第四首目に置かれている詩が、『樂府詩集』では第二首目に置かれているのである。

そして、この配列の違いによつて王維の「少年行」の趣は大きく異なるのである。別集や『樂府詩集』以外の總集の配列では一人の少年の活躍を物語的に描いた詩と読めるが、『樂府詩集』の配列では様々な場所で活躍する少年達を描いた詩と読めるのである。

樂府は、詩題と内容を踏襲して作詩するという独特の特徴があるため、そもそも連作が少ない。たとえ連作であつても、内容や趣に差異の少ない詩が並列的に並べられている場合が多く、配列の順序が作品全体に大きな影響を及ぼすことは少ない。

しかし、王維の「少年行」は、配列によって作品全体の内容に違いを生じており、このことは同じ内容をただ並列的に並べたのではなく、配列が重要な意味を持つていことを示していることであろう。

ではどのような理由から配列の相違による読みの違いが生まれるのであろうか。

本論文では、王維の「少年行」の読みの相違が何に起因するのかを検討する^(三)。

一、遊俠の少年を詠ずる詩の展開——「結客少年場行」を中心として——

遊俠の少年を主題とする「少年行」は、唐代に登場したいわゆる新題の樂府^(三)であり、その内容は「結客少年場行」を継承する作品として位置づけられる。

そこで、本節では「結客少年場行」を中心に遊俠の少年を詠ずる詩の展開を見ておきたい^(五)。

早くは漢代に、「鷄鳴」古辞（卷第二十八）、「相逢行」古辞（卷第三十四）、「長安有狹斜行」古辞（卷第三十五）など、後の遊俠の少年を詠ずる詩の先蹤とも言うべき樂府がある。ただし、これらの主題は少年の身分や邸宅など外面的な華やかさを詠ずることにあるため、少年自身の描写は一部にとどまっている。

全篇にわたって遊俠の少年を詠じた詩を作った最も早い時期の人物は曹植で、「名都篇」（卷第六十三）、「白馬篇」（卷第六十三）、「結客篇」などがある。

曹植の場合、「捐軀赴國難、視死忽如歸（軀を捐てて國難に赴き、死を視ること忽ち歸するが如し）」（「白馬篇」第二十七、二十八句）などのように内面や心情を描き出しており、漢代の樂府が少年の外面的な様子に焦点を当てて詠ずるのは対照的である。

次いで、西晋の張華が遊俠の少年を詠ずる詩を多く作っており、「博陵王宮俠曲二首」其二（卷第六十七）で「生從命

子遊、死聞俠骨香。身没心不懲、勇氣加四方。(生きて従わん 命子の遊、死して聞かん 俠骨の香。身は没せども 心懲りず、勇氣 四方に加う。)(第十五く十八句)など、曹植のように少年の内面や心情を詠ずる。

東晋の樂府断絶の後、鮑照が「白馬篇」(巻第六十三)や「結客少年場行」(巻第六十六)などの遊俠の少年を詠じた作品を作っている。

そのうち、鮑照の「結客少年場行」は、曹植「結客篇」の「結客少年場」という一句を取った鮑照創始の詩題で、これが後に盛唐の「少年行」へとつながってゆく。

佐藤大志氏が鮑照の樂府について「具体的な事柄の叙述を用いて、作品中に物語を形成するような叙事的樂府」と指摘するように、鮑照の「結客少年場行」の特徴は、少年が「郷里」から「遠方」へ逃げ、再び「郷里」へ帰ってくるという移動を描くことで物語が展開しているところにある。この特徴は、以降の「結客少年場行」に継承されていく。

鮑照の「結客少年場行」が「郷里↓遠地↓帰還」という少年の移動によって物語が形成される一方で、鮑照以降の「結客少年場行」では、「遠地」が具体的に「戰場」に設定され、しかも「帰還」の場面では戦いに勝利して帰還する様子が描かれており、物語の流れが「都市↓戰場↓凱旋」と変化するものの、少年の移動によって物語が形成されるという特徴は継承されていく。

ところが、李白の「結客少年場行」(巻第六十六)にはこの特徴が見られない。

李白の場合、少年の様子や行動が都市という一場面において述べられており、「結客少年場行」の伝統からは外れているのである。

また、李白の「結客少年場行」では、少年の行動に批判的な表現があるが、これは中晩唐期の作品の先駆的作品と言え、この時期にあつては革新的な詠じ方である。

二、李白・杜甫の「少年行」——伝統からの逸脱——

盛唐以降の「結客少年場行」には二つの大きな変化が見られる。

一つは、「少年行」という詩題の登場である。鮑照以降の「結客少年場行」は、盛唐期になると極端に減少し、代わって「少年行」という詩題の作品が多く作られるようになる。

『樂府詩集』によれば、盛唐以降で「結客少年場行」を作っているのは李白と沈彬の二人だけであるが、「少年行」の作者は十四人(十一)を数えるのである。

もう一つは、連作の増加である。『樂府詩集』によれば、「少年行」を作った十四人のうち八人(十二)が連作として作っている。割合としては半数強であるが、それまでの遊俠の少年を詠じた詩の連作がわずかであること(十三)に鑑みれば、盛唐以降に起こった大きな変化と言える。

また、これまでの遊俠の少年を詠ずる詩は二首の連作(十三)であるが、盛唐以降の「少年行」には三首、四首の連作(十四)が見られるのも特徴である。

このような変化の最も初期にあたる作品が李白、杜甫、王維の「少年行」である。

それでは、「少年行」と詩題が変わったことによって遊俠の少年を詠ずる詩はどのように変化したのだろうか。本節では、李白と杜甫の「少年行」の特徴を見ていく。

(一) 李白「少年行」三首

はじめに、李白の「少年行」(巻第六十六)を見てみよう。李白の「少年行」は全三首で、「其一」は五言八句である。

1 撃筑飲美酒 筑を撃ちて美酒を飲み

劍歌易水湄 劍歌す 易水の湄

経過燕太子 燕太子と経過して

結託并州児 并州児と結託す

5 少年負壯気 少年 壯気を負い

奮烈自有時 奮烈 自ら時有り

因声魯句踐 因なつて声ならす 魯句踐

争情勿相欺 情を争うも相あないる 欺あなどる勿かれ

この詩は、荊軻になぞらえて少年を詠じている。

第一、二句は易水送別の場面を踏十五まえ、第三、四句では始皇帝を暗殺するために燕太子と結託する様を述べる。

第七句の「魯句踐」とは、荊軻と博打で言い争った人物である。荊軻が邯鄲に遊んだとき、魯句踐と博打をし、言い争いとなった。その時、荊軻は魯句踐に怒鳴りつけられてそそくさと退散してしま十六った。後に、荊軻が始皇帝暗殺未

遂事件を起こすと、それを聞いた魯句踐はかつて荊軻の人となりを見抜けなかつたことを後悔する十七、というエピソードである。

この詩のように、一首全編を特定の人物になぞらえて少年を詠ずる作品は「結客少年場行」にもそれ以前の遊俠の少年を詠ずる詩にも見られない詠じ方である。

「其二」は七言四句で、都市の酒場での遊俠の少年を描く。

五陵年少金市東 五陵の年少 金市の東

銀鞍白馬度春風 銀鞍 白馬 春風を度る

落花踏尽遊何処 落花 踏み尽し 遊ぶは何れの処ぞ

笑入胡姬酒肆中 笑いて入る 胡姬 酒肆の中

第四句の「胡姬」とは、市中の酒場で客に接待をする主にイラン出身の女性をいう。開元・天宝年間以降の唐では、西域文化がそれまでにないほど流行し、「胡姬」もこの時期増加した。^(千八)

この詩では、当時流行した風俗を唐代に新しい七言の絶句という短句型のスタイルでリズムミカルに詠じている。「其三」は、第一句に「君不見」を含む七言三十句である。

1 君不見淮南少年遊俠客 君 見ずや 淮南の少年 遊俠の客

白日毵獵夜擁擲 白日 毵^{きゆうりよう} 獵^{りよう} し 夜 擁擲^{ようてき}す

呼盧百万終不惜 呼盧^{ころ} 百万 終に惜しまず

報讎千里如咫尺 報讎 千里 咫尺^{しせき}の如し

5 少年遊俠好經過 少年 遊俠 好く經過し

渾身裝束皆綺羅 渾身の装束は皆綺羅なり

蘭蕙相隨喧妓女 蘭蕙 相い隨いて妓女喧しく

風光去処滿笙歌 風光 去処 笙歌滿つ

驕矜自言不可有 驕矜^{きようきん} 自ら言う 有るべからずと

10 俠士堂中養來久 俠士 堂中 養いてより 來^{このかた} 久し

好鞍好馬乞与人 好鞍 好馬 人に乞^{きよ}与し

十千五千旋沽酒	十千 五千 旋 <small>かえ</small> って酒を沽 <small>か</small> う
赤心用尽為知己	赤心 用い尽くすは知己が為にし
黄金不惜栽桃李	黄金 惜しまず 桃李を栽う
15 桃李栽来幾度春	桃李 栽えてより 来 <small>このかた</small> 幾度の春
一回花落一回新	一回花落ち 一回新たななり
府県尽為門下客	府県 尽く 門下の客と為り
王侯皆是平交人	王侯 皆是れ 平交の人
男兒百年且樂命	男兒 百年 且つ命を樂しめ
20 何須徇書受貧病	何ぞ書に徇い貧病を受くるを須 <small>もち</small> いん
男兒百年且榮身	男兒 百年 且つ身を榮 <small>えい</small> せよ
何須徇節甘風塵	何ぞ節に徇い風塵に甘んずるを須いん
衣冠半是征戰士	衣冠 半ばなるは是れ征戦の士
窮儒浪作林泉民	窮儒 浪りに林泉の民と作る
25 遮莫枝根長百丈	遮莫 枝根長さ百丈なるも
不如当代多還往	当代 還往 多きに如かず
遮莫親姻連帝城	遮莫 親姻 帝城を連ぬるも
不如当身自簪纓	当身 自ら簪 <small>しんえい</small> 纓なるに如かず
看取富貴眼前者	看取す 富貴 眼前の者

王維の「少年行」について — 新題の樂府の詠法に関する一考察 —

30 何用悠悠身後名 何ぞ用いん 悠悠たる身後の名

この詩には、それまでの遊俠の少年を詠じた詩には見られない考えを持つ少年が描かれている。

第一から十八句の前半部分には、少年時代に博打をしたり女性と戯れたり歓楽していた遊俠の者が、やがて自らが遊俠の少年を養う身分となったことが描かれる。

第十九句以降の後半部分では、「不如当身自簪纓」（第二十六句）や、「何用悠悠身後名」（第三十句）というように、現世で自分自身が出世することを何よりも重視するという少年の考えが述べられる。

遊俠の少年を詠ずる詩では、「輕生重義」^{十九}が重要なモチーフの一つである。これまでの遊俠の少年を詠じた作品は、たとえば曹植「白馬篇」で描かれる少年のように、手柄や出世のためではなく、死をもつても義のために尽くす少年が描かれていた。「其一」の荆軻に擬せられた少年もこのような人物として描かれる。

しかし、李白「少年行」其三の少年は、現世で自分自身が出世することを何よりも重視しており、これまで詠じられた遊俠の少年像とは対照的な少年が描かれているのである。

ここまで、李白の「少年行」三首を見てきたが、これらはいずれもある一地点での少年の姿を詠じており、少年の移動によって物語が形成されるという李白以前の「結客少年場行」の特徴は見られない。

そればかりか、「其一」のように特定の人物になぞらえたり、「其三」のように「輕生重義」とは対照的な考えの少年が描かれたりと、「結客少年場行」だけでなく遊俠の少年を詠ずる詩には見られない手法が用いられており、いわば伝統から逸脱した作品となっている。

(二) 杜甫「少年行」三首

次に、杜甫の「少年行」（巻第六十六）を見てみよう。杜甫の「少年行」は全三首で、全て七言四句である。

「其一」を見てみよう。

莫笑田家老瓦盆 笑う莫かれ 田家 老瓦の盆

自從盛酒長兒孫 酒を盛るに自從りて 兒孫を長ず

傾銀注瓦驚人眼 銀を傾むけては瓦に注ぎ人眼を驚かす

共醉終同卧竹根 共に酔いて終に竹根に卧すを同じくす

第一、二句では、今は老人だがかつては立派に子孫を育てたのだという自負を、「老瓦盆」と田舎の古い陶器に喩えて述べる。この詩のように遊侠の少年を詠ずる詩で老人が描かれるのは、樂府の原則から外れた詠じ方である。

樂府は詩題と内容に密接な関係があり、ある詩題のもとに描かれる内容は、それまでの樂府詩によつて概ね決められており、詩人はその内容を踏襲して詠ずるのを原則とする。

「結客少年場行」の場合は、遊侠の少年を詠ずることが最低限の原則といえ、それを継承する「少年行」もこれまでであれば遊侠の少年を詠ずることを原則とする。しかし、杜甫のこの詩は老人を詠じており、その原則を大きく逸脱しているのである。

「其二」は次のように詠じられる。

巢燕養雛渾去尽 巢燕 雛を養いて 渾て去り尽し

紅花結子已無多 紅花 子を結び 已に多く無し

黃衫年少來宜數 黃衫の年少 來たらば宜しく數うべし

不見堂前東逝波 堂前 東逝の波を見ず

この詩に詠じられるのは、第三句で「黄衫年少来宜数」とあり、少なくとも少年ではなく、少年を養う立場の年長者である。その点で「其一」と同様に、この詩も、樂府の原則から大きく逸脱している。

「其三」では荒々しい貴族の若者の様が描かれる。

馬上誰家白面郎 馬上 誰が家の白面郎

臨階下馬坐人牀 階に臨んで馬より下り人の牀に坐す

不通姓字粗豪甚 姓字を通ぜず 粗豪たること甚し

指点銀瓶索酒嘗 銀瓶を指点して酒を索めて嘗む

どこの誰ともわからない貴族の子弟が馬から下りて、名前も名乗らずに他人の腰掛けにどっかと座ると、銀の酒がめを指して酒を要求するという、傍若無人な貴族の少年を詠ずる。

このように、杜甫の作品にも少年の移動による物語の形成という「結客少年場行」の特徴が見られないばかりか、「其一」「其二」は、樂府そのものの詠じ方から大きく逸脱した作品なのである。

ここまで、李白と杜甫の「少年行」を見てきたが、どちらも伝統から大きく逸脱する作品であった。このことは、時を同じくして両者に偶然起こった変化ではない。

松原朗氏は、盛唐から中唐に起こった樂府文学の変化の一つとして、「新題の樂府」の出現を挙げ^(二七)る。松原氏によれば「新題の樂府」とは、伝統樂府題を用いないが表現の様式は伝統樂府のそれを意識的に継承するものであり、既存の伝統樂府の中から「本事・古辞・先行擬古樂府」の中にすでに蓄積された題材」の一部分を襲用することで、伝統樂府を用いることなく、伝統樂府の様式を生かした作品を作ろうとする試みであると述べる。

これは言い換えれば、伝統樂府の拘束から脱却し、新しい内容を形成していこうとする試みと言える。

李白と杜甫の「少年行」は、正しくこの代表例と言えよう。両者は「少年行」という新題を用いることで、伝統に拘束されることのない新しい遊俠の少年像を提示したのである。

(三) 李白・杜甫の「少年行」における連作

ここで、李白と杜甫の「少年行」における連作について見ておきたい。

『樂府詩集』では両者の作品を三首一組として掲載しているが、李白と杜甫の別集を見ると必ずしも三首一組ではなかった可能性がある。

李白の別集を見ると、静嘉堂文庫所蔵宋本『李太白文集』（古典研究会叢書漢籍之部第三十六卷、汲古書院、二〇〇六）、北京図書館蔵宋本『李太白文集』（宋蜀刻本唐人集叢刊二一四 上海古籍出版社、一九九四）、『分類補注李太白詩』（四部叢刊）など李白の別集では、「其一」と「其二」は続けて掲載されているが、「其三」は「其一」と「其二」とは別に掲載されている。

また、静嘉堂文庫所蔵宋本『李太白文集』、北京図書館蔵宋本『李太白文集』は「其一」と「其二」をまとめて「少年行二首」とするものの題下に「後一首亦作小放歌行（後の一首は亦た小放歌行に作る）」と注しており、「其二」は「小放歌行」という別題だった可能性がある。

杜甫の場合も、『分門集註杜工部詩』（四部叢刊）、清・仇兆鰲注『杜詩詳注』（中華書局、一九七九）、清・楊倫注『杜詩鏡銓』（上海古籍出版社、一九六二）などの別集では、李白と同様に、「其一」「其二」と「其三」は別に掲載されている。

このように、李白と杜甫の「少年行」は、三首一組の連作ではなかった可能性が大きいのである。これは、王維の「少

年行」が四首の連作としてまとまっているのと異なる点である。

三、王維の「少年行」——先例のない場面を詠ずる「其四」——

第二節では、李白と杜甫の「少年行」を見たが、王維の「少年行」にはどのような特徴があるのであろうか。本節では、王維の「少年行」を見ていこう。

王維の「少年行」（『王右丞文集』巻第一）は、みな七言四句で統一されており、『樂府詩集』と別集では配列が異なるものの、どちらも四首一組の作品として掲載されている。

「其一」では、意気の合うものと酒場で歓楽する少年が描かれる。

新豊美酒斗十千 新豊の美酒 斗十千

咸陽遊俠多少年 咸陽の遊俠 少年多し

相逢意氣為君飲 相逢う 意氣君が為に飲む

繫馬高樓垂柳辺 馬を繫ぐ 高樓垂柳の辺

第一句の「美酒斗十千」は、曹植「名都篇」（巻第六十三）の「美酒斗十千」（第十八句）をそのままの形で踏襲している。

曹植「名都篇」には、少年が郊外で獵をしたり、宮殿で酒宴を開いたりして、日々の生活を謳歌する様が詠じられており、王維のこの詩も「名都篇」に描かれる少年のように、都市での日々の生活を謳歌する少年を詠じている。

「其二」は次のように詠ずる。

出身仕漢羽林郎 出身して 漢に仕う 羽林郎

初隨驃騎戰漁陽 初めて驃騎に隨い 漁陽に戦う

孰知不向辺庭苦 孰か知らん辺庭に向いて苦しまざるを

縦死猶聞俠骨香 縦い死すとも猶お聞かん 俠骨の香しきを

第一句の「羽林郎」は、漢陽、隴西、安定、北地、上郡、西河という西方の六郡の良家から選任される皇帝の警備軍を指す。^(三十一)

六郡の人々は、『漢書』卷二十八下・地理志第八下に「天水、隴西、山多林木、民以板為室屋。及安定、北地、上郡、西河、皆迫近戎狄、修習戰備、高上氣力、以射獵為先。(天水、隴西、山に林木多く、民 板を以て室屋と為す。安定、北地、上郡、西河に及んでは、皆戎狄に迫近し、修習戰備し、氣力を高上し、射獵を以て先と為す。)」と記され、日頃から訓練を重ねる力強く勇ましい人々であり、その姿は遊俠の少年と重なる。

第二句では驃騎將軍であった霍去病に従い、少年は羽林郎となつて始めて戰場に赴くことが述べられる。この少年は六郡出身の勇猛な少年であるため、第三句では「孰知不向辺庭苦」と戰場では難なく戦闘をこなす様が詠じられる。

第四句は、張華「博陵王宮俠曲二首」其二(卷第六十七)の「生徒命子遊、死聞俠骨香。身没心不懲、勇氣加四方。」(第十五く十八句)を踏まえて、少年の強烈な意気を詠ずる。

「其三」は次のように詠ずる。

一身能擊兩彫弧 一身 能く兩彫弧を撃き

虜騎千重只似無 虜騎 千重 只だ無きに似る

偏坐金鞍調白羽 偏に金鞍に坐し白羽を調え

紛紛射殺五单于 紛紛として射殺す 五单于

第一句は、曹植「名都篇」の「一縦はな両禽連（一たび縦はなてば 両禽 連なる）」（第十句）や曹植「結客篇」の「一撃兩尸僵（一撃 兩尸僵たおる）」（『文選』卷第二十九所収の張協「雜詩十首」其七の李善注に引用）を踏まえ、一人で二人前の力を持つ強い少年を詠ずる。

第四句の「五单于」とは、五人の匈奴の王を指す。『漢書』によれば、匈奴の虚閭權渠单于が病死した後、匈奴では王の座をめぐつて争いが起き、五人の王が並立した。^(二十二)この時の五人の王を「五单于」と呼ぶ。五人の王はそれぞれに漢を攻撃したため、漢では家畜が減り、食料が無くなり人民は飢餓に苦しみ、漢国内は大混乱に陥ったのである。

少年は、このように漢を苦しめた強敵「五单于」を一人で次々と仕留めてゆく。「其二」では意気の強烈な少年を描いたが、この詩では力強い少年を描いている。

「其四」を見てみよう。

漢家君臣歆宴終 漢家の君臣 歆宴終え

高議雲台論戰功 雲台に高義して戦功を論ず

天子臨軒賜侯印 天子 軒に臨み 侯印を賜い

將軍佩出光明宮 將軍 佩びて 光明宮を出ず

第一句で戦争の勝利を祝う宴会の様が描かれ、第二句で論功行賞の場面が詠じられる。第三句では、天子から恩賞が下賜され、第四句で恩賞が下賜された將軍が描かれる。

この詩では、天子から恩賞を下賜されるのは少年ではなく「將軍」である。ただ、「其二」では、少年が驃騎將軍霍去病に従って出征する様が述べられているから、ここでは少年の上官である將軍を称えることで、勝利を底辺で支えた少年を賞賛するのであろう。

以上で見たように、王維の「少年行」は、曹植や張華の詩句をそのまま引用しており、直接的な継承関係にある「結客少年場行」よりも、曹植や張華といった「結客少年場行」以前の作品を踏襲していることがわかる。

これは李白や杜甫の「少年行」と大きく異なる点である。李白や杜甫は、「結客少年場行」やそれ以前の内容とは大きく異なる伝統から逸脱した作品であったが、王維の「少年行」は復古とも言うべき内容になっていたのである。

ところが、「其四」に描かれる論功行賞と恩賞の下賜の場面に関しては、従来の遊俠の少年を詠ずる詩には見られない場面を詠じている。

第一節で述べたように、鮑照以降の「結客少年場行」には少年の移動によって物語が形成されており、その移動パターンは鮑照の「結客少年場行」では「郷里↓遠地↓帰還」であり、劉孝威以降は「都市↓戦場↓凱旋」であった。

論功行賞・恩賞の下賜というのは、一般的に戦争の勝利という功績に対してなされ、しかも都市に帰還後に行われるものであるから、論功行賞・恩賞の下賜の場面は「都市↓戦場↓凱旋」という流れの結末の部分に「都市↓戦場↓凱旋↓論功行賞・恩賞の下賜」と位置づけることができる。

それでは、先行作品において結末部分がどのように描かれているかを確認してみよう。

「結客少年場行」では、次のように描かれる。

①少年の嘆きを述べる

今我独何為 今我独り何をか為さん

輾轅懷百憂 輾轅として百憂を懐う

(鮑照)

②出世を述べる

昔為北方將 昔 北方の將と為り
今為南面孤 今 南面の孤と為る
邦君行負弩 邦君 行きて弩を負い
県令且前驅 県令且つ前驅す

(劉孝威)

今年喜夫婿 今年 喜ぶ 夫婿の
新拜羽林郎 新たに羽林郎を拜するを
定知劉碧玉 定めて知る 劉碧玉
偷嫁汝南王 偷かに汝南王に嫁ぐ

(庾信)

③ 出世を望むことを述べる

若使三辺定 若使し三辺を定むれば
当封万里侯 当に万里の侯に封ぜられん (孔紹安)

④ 戦争の終結を述べる

歌吹金微返 歌吹して 金微に返り
振旅玉門旋 振旅して 玉門旋る
烽火今已息 烽火 今 已に息み
非復照甘泉 復た甘泉を照すに非ず

(虞羽客)

追奔瀚海咽 追奔し 瀚海に咽び
戦罷陰山空 戦い罷め 陰山空し
帰来謝天子 帰来して 天子に謝す
何如馬上翁 何如 馬上の翁

(盧照隣)

まだ出征していない庾信の「結客少年場行」には論功行賞・恩賞の下賜が述べられないのは当然として、虞羽客と盧照隣の「結客少年場行」では、少年は勝利して帰還しているけれども、その戦功に対する論功行賞・恩賞の下賜までは描かれていない。

劉孝威と庾信の「結客少年場行」では少年の出世は述べられているが、論功行賞・恩賞の下賜の場面までは描かれな

い。
また、「結客少年場行」以外の遊俠の少年を詠じた詩を見ると、第一節で挙げた曹植や張華は戦場という一場面における少年の気概を述べて一首が締めくくられており、戦争の結末や少年のその後には触れられていない。

このように「結客少年場行」だけでなく、それ以前の曹植や張華などの遊俠の少年を詠じた詩を見ても、論功行賞・恩賞の下賜の場面は詠じられていないのである。

つまり、「其四」で描かれる論功行賞・恩賞の下賜という場面は、王維の「少年行」に独自の場面なのである。

「はじめに」で指摘したように、王維の「少年行」は配列によって読みが変わる。その配列の相違は王維の別集や『樂府詩集』以外の総集では第四首目にある詩、すなわち「其四」の配置場所にある。

つまり、王維の「少年行」の配列順による読みの違いは、「其四」がそれまでの遊俠の少年を詠じた詩に例のない独自

の場面を描いているということが大きく関係しているのではないかと予想されるのである。では、配列の相違による読みの違いと「其四」の関係を見てみよう。

四、王維の「少年行」の連作―連作の意識的活用―

王維の「少年行」其四は、論功行賞・恩賞の下賜という先行する遊俠の少年を詠じた詩には見られない場面を詠じていた。

そして、その場面は「都市↓戦場↓凱旋」という流れの延長に「都市↓戦場↓凱旋↓論功行賞・恩賞の下賜」と位置づけることができた。

ここで王維の「少年行」の内容を底本の配列によってもう一度確認してみよう。「其一」では都市における遊俠の少年が描かれ、「其二」では羽林郎に選ばれ戦場へと向かう少年が描かれる。そして「其三」では少年が辺疆で勝利を収める様を詠じ、「其四」では帰還した將軍に恩賞が下賜される場面が描かれる。「其四」は將軍を詠ずるが、これは將軍に恩賞が下賜されることを詠じて少年の活躍を賞賛するものであることを第三節で述べた。ここでも遠回しではあるが少年を詠ずる。

この配列の場合、「其一」から「其三」への物語の展開は、先行の「結客少年場行」の「都市↓戦場↓凱旋」という流れに沿っている。

また、論功行賞・恩賞の下賜を描く「其四」は、少年の勝利を描く「其三」の次に配置されており、第三節で論功行賞・恩賞の下賜を「都市↓戦場↓凱旋↓論功行賞・恩賞の下賜」と位置づけた流れに沿うものになっている。

そのため、先行の「結客少年場行」の物語の流れを壊すことがなく、したがって先行の「結客少年場行」のように一

人の遊侠の少年の活躍を物語的に詠じた詩と読める。

一方、「其四」が第二首目にある『楽府詩集』の配列の場合、「都市↓戦場↓凱旋」の流れを分断してしまうため、様々な場所で活躍する少年達を詠じた詩と読めるのである。

第三節で見たように、王維の「少年行」の「其一」から「其三」まではそれぞれに先行作品を踏襲しており、「其四」が第二首目にある『楽府詩集』の配列であつても、一首一首を遊侠の少年を詠じた詩として違和感なく読むことはできる。しかし、「少年行」が継承する「結客少年場行」には、少年の「都市↓戦場↓凱旋」という移動によって物語を形成するという特徴があり、先行作品を踏襲する楽府の観点からすれば、底本の配列が王維の意図したものであると言えよう。

楽府は、先行作品の主題やモチーフを踏襲することで成立する特異な形式であり、楽府の主眼の多くは先行作品によって継承されているそれらの主題やモチーフをどのように詠ずるかにある。一方、連作は、いくつかの詩を並べて、全体としてどんな主題を詠ずるかに主眼がある。

つまり、楽府は主題の詠出の方法に、連作は主題の内容に主眼があるといえる。

そのため、先行作品によってあらかじめ主題が提示されている楽府は、どんな主題を詠ずるかに主眼のある連作には本来適さないジャンルなのである。

しかし、王維は鮑照以来の「結客少年場行」が持つ物語の流れを連作で表現することで、楽府というジャンルで連作を巧みに用いることに成功し、楽府に新しい境地を開いたのである。

おわりに

本論文で検討したように、王維の「少年行」の配列による読みの違いは、「結客少年場行」が持つ遊俠の少年の移動によつて物語を形成するという特徴が連作を用いて再現されていること、「其四」が先例のない論功行賞・恩賞の下賜という場面を詠じたものであることに起因するのである。

また、連作を意識的に活用するというのはそれまでの樂府には見られないものであり、樂府の画期をなすものといえよう。

王維は、「少年行」という新題のもとに、伝統的な様式を踏襲しつつも、連作を活用することで伝統樂府からの脱却を目指したのである。

注

- (一) 例えば、『文苑英華』、『万首唐人絶句』、『唐詩類苑』、『全唐詩』などに収録される王維の「少年行」は、みな王維の別集と同じ配列である。
- (二) 王維の作品は静嘉堂文庫所蔵宋版『王右丞文集』（古典研究会叢書漢籍之部第三十二卷、汲古書院、二〇〇五）に拠り、王維の「少年行」の配列も静嘉堂本の配列を基準とする。王維以外の樂府作品は『樂府詩集』（中国古典文学基本叢書、中華書局、一九七九）に拠る。その他の作品は適宜依拠したテキスト名と巻数を挙げる。
- (三) 「新題の樂府」という名称については、松原朗『「歌行」の形成過程―初唐を中心にして―』（早稲田大学中国文学会『中国文学研究』第九期、一九八三）、松原朗「盛唐から中唐へ―樂府文学の変容を手掛かりとして―」（中国詩文研究会『中国詩文論叢』第十八集、一九九九）などを参照。
- (四) 『樂府詩集』によれば「少年行」の作者として李白、王維、王昌齡、張籍、李疑、劉長卿、令狐楚、杜牧、杜甫、張祜、韓翃、

施肩吾、僧貫休、韋莊（『樂府詩集』掲載順）があげられており、「少年行」が盛唐以降に登場した樂府題であることがわかる。

(五) 漢から唐までの遊俠の少年を詠ずる詩の展開に関して齋藤聡「『結客少年場行』について―漢から盛唐までの展開―」（国士館大学漢学会『国士館大学漢学紀要』第十一号、二〇〇九）にすでに詳しく論じた。したがって繰り返しになるが、論述の都合上、その概要を記すことにする。

(六) 福山泰男「曹植の『少年』」（山形大学『山形大学紀要（人文科学）』第十六巻第二号、二〇〇七）

(七) 鮑照「結客少年場行」の『文選』李善注に「曹植結客篇曰、結客少年場、報怨洛北芒」とある。『樂府詩集』も李善注と同じ文を掲載する。

(八) 佐藤大志「鮑照樂府詩論」（『六朝樂府文学史研究』各論第一章、溪水社、二〇〇三）

(九) 樋口泰裕「少年」（後藤秋正・松本肇編『詩語のイメージ―唐詩を読むために』第四章、東方書店、二〇〇〇）、齋藤聡「『結客少年場行』について―漢から盛唐までの展開―」（注（五）掲出）参照。

(十) 李白、王維、王昌齡、張籍、李嶷、劉長卿、令狐楚、杜牧、杜甫、張祐、韓翃、施肩吾、僧貫休、韋莊（『樂府詩集』掲載順）

(十一) 李白（三首）、王維（四首）、王昌齡（二首）、李嶷（三首）、令狐楚（四首）、杜牧（二首）、杜甫（三首）、僧貫休（三首）

(十二) 連作のものとしては張華「博陵王宮俠曲二首」、齊・孔稚珪「白馬篇二首」がある。

(十三) 注（十二）参照。

(十四) 注（十一）参照。

(十五) 易水送別の場面には「至易水之上、既祖、取道、高漸離擊筑、荆軻和而歌」（『史記』卷八十六）とある。

(十六) 「荆軻游於邯鄲、魯句踐与荆軻博、争道、魯句踐怒而叱之、荆軻嘿而逃去、遂不復会。」（『史記』卷八十六）

(十七) 「魯句踐已聞荆軻之刺秦王、私曰、嗟乎、惜哉其不講於刺劍之術也。甚矣吾不知人也。曩者吾叱之、彼乃以我為非人也。」（『史記』卷八十六）

(十八) 内田幹之助「当壇の胡姬」（『増訂長安の春』東洋文庫九一、平凡社、一九六七）参照

(十九) 『樂府詩集』(卷六十六)の「結客少年場行」の解題に引く『樂府解題』に「『結客少年場行』言輕生重義、慷慨以立功名也。」とある。

(二十) 松原朗「盛唐から中唐へ―樂府文学の変容を手掛かりとして―」(注(三)掲出)。

(二十一) 『後漢書』百官志第二十五「光祿勳・羽林郎」の劉昭の注に「常選漢陽、隴西、安定、北地、上郡、西河、凡六郡良家補。」とある。

(二十二) 「虚閭權渠单于請求和親、病死。右賢王屠耆堂代立。骨肉大臣立虚閭權渠单于子為呼韓邪单于、擊殺屠耆堂。諸王並自立、分為五单于、更相攻撃、死者以万数、畜産大耗什八九、人民飢餓、相燔燒以求食、因大乖乱。」(『漢書』卷八・宣帝紀)

(筑波大学大学院人文社会科学科博士課程)